
ノアの箱舟

不田颯奈夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノアの箱舟

【Nコード】

N3024M

【作者名】

不田颯奈夜

【あらすじ】

汚れた世界を変えると息巻いた若き自分。
気付けばその汚れに染まっていた今の自分。
世界の流れに身を任せ、必要悪を理解し、汚い世界の一部となり…
…それでも諦め切れなかった世界の改変。
そんな自分の許に掛かって来た一本の電話が、消えたはずの炎を再燃させる……。

prologue - about me (前書き)

大分前に考えていたネタを文章化して見ました。

初めての本格的な創作活動(「ちゃんと文章を書いてみた」)。

内容は旧約聖書の一説をヒントに、未来っぽい架空世界を舞台とした、ショートショート以上小説未満のミステリーもどき。いや、ホラーに近いのかな。ま、ノベルス、ということ。

頭にあるのはオチと設定のみ。

思いつくままに書き進めていくストーリー！。

とりあえず、このプロローグだけじゃ何が何だか分からないと思いますので、次の第一章を見てやって、それから継続するかどうかを決めてください。

めがつさ未熟な作者ですが、どうぞよろしくお願いします。

prologue - about me

prologue - about me

私にも正義を志していた過去があった。
私にも理想に燃えていた過去があった。
私にも世界を変えようとした過去があった。

《世界は汚い。大人達は汚い。こんな大人には僕はならない。こんな世界を僕は放っては置かない。》

あの頃は若かった。何も知らなかった。何故汚れた大人達は、こ
うも汚いまま生きていけるのかと思った。生き汚いことに耐えられ
るのかと思った。

それは違う。今なら分かる。人が生きていくこと、それがそもそ
も汚いのだ。そして、生きていくためには、愛する者を守るには、
生き汚くとも耐えるしかないのだ。

だが、一方では未だに思う。

もしも、全ての人が若かりし頃の私と同じ思考なら、助け合って
生きていけるなら、世界は……。

詮無いことだ。世界はもう出来上がっている。未だ成長の余地は
あるかもしれない。だが、それでも、世界の根底に渦巻いている汚
い物は消えて無くなりはいないだろう。

そう。それは必要悪。世界を動かす潤滑油。

頭では理解している。身体もその潤滑油に染まり切っている。

……それでも、心の奥底には未だ、頭で何度否定しても割り切れ
ない自分がいた。

第一章に入りました。

しかし、未だあまり話は進みません。触りにも入ってません。

p a r t 2 から本格的に話に入ります。

もう少し継続の判断を待つて頂けると幸いです。

ブルブルブルブル。不意に机の上の電話が鳴った。一瞬吃驚して、受話器を取った。

『社長、国土交通省の上村様からお電話です。お繋ぎしますか？』

秘書からの取次ぎ伺いだった。

社長室に電話を繋ぐ方法は三つある。

一つ目は、我が社の受付に電話して取次ぎを求める。但し、社長、つまり私に取次ぐ必要があるだけの事情や、それ相応の立場がないと、受付の判断で取次ぎを断ることが出来る。仮に受付が取次ぎを許可しても、次に繋がるのは私の秘書で、私自身まで辿り着くことはほとんど無い。かなり確実性の低い方法だ。

二つ目は、社長室への取次ぎ専用番号に電話を掛ける。これは私の秘書へと繋がり、用件の重要度に関わらず、私が電話を受けるか否かを決定することになっている。これは、この番号が一部の人間、企業、官庁にしか知られていない為、ある程度の立場にある人間しか電話を掛けられない事から成り立っている。今掛かってきた電話はこれだ。

三つ目は、社長室へ直接電話を掛ける。これならば、何も通さず直接私と会話が出来る。だが、この社長室への直通番号は極一部の選ばれた者しか知らない。企業であれば、大企業であることが第一条件で、社長以上の役職の人間、日本政府であれば、事務次官以上の人間だ。ちなみに、ここでわざわざ日本政府と言ったのは、当然、諸外国の政府の上級職にも電話番号は知られているからだ。但し、小国には最高位の人間にしか知らされていないし、その国の誰一人として知らない国も少なくない。また、特殊なセキュリティが掛けられていて、こちらから許可した回線でないと、番号を知っていても繋げることは不可能、さらに、番号の打ち方に特殊な操作が要る。確実に私と話せるが、選ばれた者のみの方法だ。

今は執務中だったがしかし、今現在、私の仕事は無いも同然。することもなく、ただ呆としていただけだったから、少し驚いただけで、さして問題は無かった。

「ああ、頼む。」

そう短く告げると、プツンと回線が切り替わる音がして、上村な男が電話に出た。正直、彼には一目置いていた。この男のような人間しか世界にいなかったらと、度々考える。

「不知火社長、突然のお電話申し訳ございません。」

「構わない。君とて大変だろう。未だ三年目だったか？上司の意思を頑固な中年男に伝え、頑固な中年男の反意をさらに頭の固くて自己保身の塊のような上司にぶつけなくてはならない。板挟みで、君の苦勞は計り知れない。」

「そう言つて下さると幸いですが、しかし不知火社長、間違いが二つほど。社長は未だお若いです。中年には未だ遠い。青年と名乗つても問題は無いかと。」

「ははっ。この中年を青年と呼ぶとなると、君は歳の上では少年だ。」

「歳では納得しかねますが、中身は未だ未だ未熟な餓鬼ですよ。これからご指導のほど、よろしくお願い致します。」

「いやいや、若い、純粋な心を失つてはいけない。私みたく、社会の澱みに飲まれてはな。それに君は成長も速い。少なくとも、名ばかりは君の上司の三井君よりは仕事は出来るし、頭の回転も速いから、柔軟な対応も出来る。きつちりとした、本当にお役所仕事しか出来ない連中に君の事を見習わせたいよ。」

「私のことを買いかぶりすぎですよ。」

「謙遜はするな。自己の能力を正確に把握出来ないものは墮ちる。高めに見積もつていても、低めに見積もつていてもな。さて、間違いの二つ目は何だ？」

「ああ、それでしたら、先ほど社長が私の評価として仰ったことをそのまま社長にお返ししたら大丈夫です。むしろ社長ほど頭の柔ら

かい方は中々いらつしやらない。古い考えや、自分の意見に縛られず、譬え新入社員の意見であつても理が適つていれば受け入れる。貴方のような方が社長をされている企業が世界一にならない方がおかしい。」

「いやいや、企業は私一人で成り立っている訳ではない。私一人の力など微々たる物だよ。」

「ご謙遜を。ご自分の能力を正確に把握出来なければ堕ちてしまいますよ。」

「おっと、私の言葉をそのまま返されるとは。これは一本取られたな。」

彼、上村君にはこういう所で頭の回転の速さを感じる。目上の者に対して敬意を怠らず、それでいて必要以上に臆したりしない。未だ若いのに立派な青年だ。

「さて、用件は何だ？」

談笑はここまでにして本題に入る。

「はい。先日政府が許可を出したりニアモーターカーの路線拡大はご存知ですね？」

「ああ。ARの方の地下路線、東京―仙台間だな。」

現在、日本の主な鉄道企業は二つ。JRとARだ。JRは主に地上路線を担当、ARは地下路線だ。また、どちらもニアモーターカー業には着手しているが、JRとしては、高速道路などの土地の兼ね合いがあり、リニアの路線を各地に作りこすすれ、それらを繋ぐことは出来ていなかった。しかし、ARは発想を変え、地下に作れば北海道から沖縄までを繋ぐことが可能だと考えた。だが当時、地下路線を掘るのにかなり時間が掛かった。そもそも穴を掘る速さが遅かった上に、既存の地下鉄や、地盤の頑丈さ、振動による公害などを考慮してかなり深いところまで掘らなくてはならなかった。当時の技術であれば、ARが思い描いた北海道から沖縄までを繋ぐのに五十年は掛かっただろう。

だが、四年前、我が社の研究グループが新たな掘削方法を考案し

た。地殻を構成する物質に対してのみエネルギーの伝達効率のいい特殊な電磁波を当て、原子構造を組み替え、物質を変化させ、ほぼ空気と同じ混合物を作り出すという物だった。発案者に由来して、村上掘削法と呼ばれている。

未だ机上の空論でしかなかったこの案に乗ったのがA Rだった。A Rの投資により僅か一年でこの技術は完成。北海道から沖縄を繋ぐのに五年という驚異的なスピードでの掘削が可能という試算が出た。A Rは既に東京から鹿児島まで路線を繋げており、東京―広島間については既に運用が始まっている。

そして先日、A R社内で東京―仙台間の路線拡大を決定。掘削の許可を政府に求め、許可が下りたのだった。

「この件に関してはA Rに一任してあるはずだが？」

「ええ。確かにそうなのですが、村上掘削法に反対するグループが地域住民を唆しているらしく、一部で反対運動が起こっているのです。」

「ああ。溜息をつく。何時の時代も愚かな民衆には困ったものだ。」

村上掘削法は、発明されてから未だ日が浅い。だから、安全性に問題がある可能性がある等と言い張る輩がいるのだ。そして、そういった輩に煽動されるのは無知な民衆。全く、我が社は安全性のチェックには全身全霊を掛けていると言っている。社の信頼に関わるから、社長である私が徹底的に危険性を排除させた。だから、今まで一度も事故は起きていないし、毎年効率も安全性も上がっている。我が社が無料で配布している村上掘削法についてのパンフレットを読めば、小学生でもその安全性は分かるというのに。

「全く、実に愚かな民衆には腹が立つな。無知が悪いとは言わないが、正しいことを知ろうとするくらいはしてもいいのではないか。」
「全くその通りです。それで、反対運動により工事が一向に進まず、それで……えと……」

「ここに来て上村君が口を濁した。だから、私が後を続けた。」

「我が社が裏から手を回してこの運動を止めさせばいいのだな？そ

して、見返りとして幾つかの仕事を回すと。」

「……はい。そうです。」

上村君は未だ純粹だ。だから、やはりこういった汚い裏の仕事を口にするのは抵抗があるのだろう。

「すみません、本来私が伝えなくてはならないのに。」

「いや、構わない。寧ろ君には何時までもその感覚を持っていたもらいたい。汚いことが当たり前になってはお仕舞いだ。それに君は上に言われていることをただ伝えているだけだ。君は何も悪く無い。分かったかね？」

「……はい。それでは失礼します、不知火社長。」

「ああ。」

電話が切れた。私も一旦受話器を置き、もう一度受話器を上げて内線七二九に。裏交渉専門の課への直通回線だった。

「もしもし、不知火社長ですよね。本日のご用件は？」

「ARの東京―仙台間の路線建設への反対運動を鎮めてくれ。」

「了解しました。それでは。」

「ああ、頼んだ。」

これだけ伝えれば、彼らは独断で運動を鎮めてくれる。それも、最小限の出費で。本当に優秀な奴らだ。

社会の潤滑油。我が社にはそんな顔もあつた。そしてその役目を受け持っている私は油污れで真つ黒だった。

……こんな自分を省みると、心の底の、未だ情熱を持っている自分が声を上げる。

第一章後半です。

話が動き始めます。

短いですが、どうぞお楽しみ下さい。

次からは面白くなるはず。執筆中です。

第二章、すぐ公開する予定ですのでお待ち下さい。

若かりし頃、世界を変える、そう息巻いていた私は、今世界を動かしている物を大学で学ぼうと思った。

過去に於いてはそれは宗教であっただろうし、今となってもそれは政治だと言えなくも無いだろう。また、ある意味では発明は世界を動かす。

だが、本当の意味で世界を動かしている物、それは、利益であり、経済だ。

発明は、使う人あつての発明だし、政治も利益が無いならば誰がこんな大変な仕事をしようか。論議を醸す事を覚悟で言うならば、宗教だつてそうだ。

だから、私は大学で経済学を専攻した。

高校時代、既に世界に嫌気が刺していた私は、先ず世界を動かしている物について知ろうと思った。そして、どうせなら最高の環境で学びたいと考え、日本一であろう国立東京大学を目指した。幸い私の成績はよく、僅かな勉強のみで入学試験に合格。その後も世界を変えると情熱を燃やしていた私は、かなりの学習意欲を持ち、勉強に励み、気付けば大学を首席で卒業していた。

大学側からは院へ進む事を勧められていたがしかし、私の目標は世界を変える事だ。研究室に籠つて、一般人には何ら必要のない論文を書いて、どうやって世界を変えようか。少なくとも就職する事は確定事項だった。

問題は何処に就職するかだ。

先ず思い浮かんだのは公務員。だが、公務員など政府が決めた仕事を熟すだけの仕事だ。それで世界の何を変えられるか。第一、仮に何かを変えられたとしても、その範囲は日本に限る。世界ではない。

では政治家は如何か。確かに世界を変える力はあるがしかし、こ

れも同じ。変えられるのは日本だ。世界ではない。

ならば世界的な大企業であれば如何だろうか。世界の経済を担っている存在の一つだ。少なくとも力はあるし、範囲も世界だ。

そう考えた私は、ある企業に目を着けた。幾つかの重工業で生産量国内一位を争い、海外に進出を始めており、尚且つ未だ成長途中の企業。

特に成長途中というのが大事だった。それは、新たな人間が重役に入っていく事が出来る余裕があるということで、今後、世界を変える立場に就きたい私には必要不可欠な条件だった。

東京大学での成績優秀者。このプロフィールはかなり有利だった。又、経営学の授業も取っていた事が功を奏した。

入社希望の手紙を書き、履歴書を同封して郵送すると、当時はまだ新人社員募集期間でもなかったのにも関わらず、それを取り合ってくれ、更には面接をしてくれる事となった。

面接では先ずこう言われた。『履歴書を見て君の能力を買った。募集期間でもないのに勝手に手紙を送って来た思いと、その行動力も評価する。今日の面接を最終判断とするが、今日確認するのは君の健康面くらいだ。あとは多少の能力チェックをさせてもらうが、履歴書通りの君の能力なら全く問題ないだろう。』

驚いた。こんなに頭の柔らかい人がいるとは。自分としては手紙も履歴書も全く無視されても仕様が無いと思っていた。それを取り合ってくれ、あろう事かそれを判断材料に大凡の採用を決めてしまうとは。

私は思った。一《こんな人の下に付いて、この人柄を吸収したい。

》

そして芽出度く採用された。待遇は、頗る良かった。研修期間を常務取締役の許で過ごし、研修終了後、行き成り部長補佐の役職を貰った。今後のスピード出世は決まったような物だった。私は、この期待に応えようと働いた。

主な役割は経営だった。最初は、我が社の持つ小さな分野の運用

を任された。その中で、新たなアイデアを積極的に採用した所、そのほとんどが成功。これにより私の出世スピードは更に速まる所となった。

常務取締役となったのは入社から五年経った時だ。そこで私は予かねてから考案していたアイデアを会議で発案。それは、より多くの業種の企業を配下に置く、という事だった。状態としては戦前の財閥に近い。

表向きの目的は各業種で世界で争える基盤を作り、より多くの利益を上げる事。だが、私個人としての本当の目的は、各分野にコネクションを作り、より世界を動かし易くする事。ただ、多大な利益を上げられることは確実だったので難なくこの案は実行に移すことが出来た。

この後の私の出世は時間の問題だった。

当時の社長が引退すると、私は副社長に昇進し、当時の副社長は社長となった。だがその後、社長の現金横領が社内で発覚した。そこで私は、この件を極秘裏の内に処理し、社長を退陣させることを取締役会より申し受けた。これが、最初の私の汚れ仕事だった。

そして順当に私は社長となった。社長となって暫くはかなり忙しかった。自分の提言した我が社の財閥化、これを行うために各方面との交渉があったからだ。ある時は既存の企業の吸収交渉。ある時は全く新しく企業を作った。

また、汚れ仕事も回ってきた。当時、我が社は大きかったとはいえ、国内トップ企業と比べるとかなり劣った。だから、国単位の大きな裏の仕事は回って来なかったが、それでも社内の問題は内々に処理する必要があった。僅かな問題が起こっただけで信用という物は消え去る。

民衆は買物に於いて信用という物に重点を置く。だから、一度でも問題が起こったメーカー、製品は避ける。民衆にとって重要な問題は問題が起こったという事実だけだ。たとえ、企業側が問題が起こった後、直ぐに謝罪を行ったとしてもそんな事は関係ないのだ。

だが、逆に言えば問題が起こった事が発覚しなければ問題ない。当然、後ほど問題を隠していた事が判れば企業の受けるダメージは測り知れない。しかし、問題が起こった事が直ぐに知れてもかなり大きなダメージを受ける事になるのだ。如何考^{どう}えても問題を隠した方がいい。又、遣り様に拠^よつては隠し切る事も可能なのだ。

もし、この汚れ仕事を受けなければ企業は利益を得られなくなる。そうすると、下請け会社にお金も払えないし、社員に給与も払えない。最悪、お金に困って路頭に迷う者も出るし、経済にも影響を与える。

汚れ仕事は必要なのだ。これは、私が今まで考え抜いて出した結論だった。

そうして、極力企業の損失を抑え、多くの利益を上げてきた。世界各国に進出も果たせし、かなり幅広い分野に於いて結果を出してきた。そして気付けば、世界一、二を争う企業となっていた。

「ふう。」

一息吐く。汚れ仕事の後は未だに何処か喪失感がある。ただ、同時にこの喪失感がある事が、私の心に未だ汚れ切っていない部分がある証明となっているように思う。

この喪失感を振り払う為にコーヒーが欲しくなった。秘書へ電話を掛ける。

「コーヒーを頼む。」

「はい、畏^{かしこ}まりました。」

秘書にはこれだけ伝えれば十分だった。私の好みは細かく挽いた豆からかなり濃い目に入れた物だ。豆は秘書が自己流にブレンドした物。毎日ランダムに割合を変えて淹れてくれる。

ただし、濃い目に淹れて貰う為、時間が掛かるのが玉に瑕だったが、その待ち時間を含めてコーヒーの味だと思う。

さて、何をしてコーヒーを待とうか。

ピロロロロロ。ピロロロロロ。

不意に電話が鳴った。秘書からの電話とは音が違う。

……社長室直通電話専用の音だった。

余程の事がない限りこの音を聞くことはない。前に聞いたのはアメリカのツインタワーに飛行機が突っ込んだ時だったか。

さすがに少し緊張し、しかしその動揺を出来得る限り消して電話に出る。

「……もしもし。不知火だ。」

「もしもし、初めまして。私、“ノアの箱舟”の浦沢と申します。」

第二章に入ります。

第一章からの続きですが。

話が本筋に入ります。ただ、今回はぶっ飛んでいます。

颯奈夜コンピューターは誤作動を起こしてあらぬ所へ向かっていきます。

突如作風が変化している感じですが、ご容赦を。

また、今回は挿絵が入っています。

友人颯-hayat e氏に依頼し描いて貰いました。

あくまで小説の挿絵としてなので、簡単なデッサンにして貰いました。おまけ程度に考えていただければ。

では、お楽しみ下さい。

> i8725 — 1328 <

ノアの箱舟？旧約聖書の一説だ。ならば宗教団体か？しかし、社長室への直通電話が掛けられるのはバチカンかエルサレムくらいだ。旧約聖書であることを考慮するとエルサレムか？だが、私の取り込みを謀る派閥からだとすると……他の派閥を潰す事を考えているとするとカトリック系か？……遣りかねん。あるいはもっと別の新興宗教か？私の様な立場の人間が教徒であるならば、今後の布教活動も楽だろう。何より資金援助が望める。ならば十分に有り得るな。だが、その程度の存在が如何にして社長室へ直通電話を掛けたか。「浦沢君と言ったか。生憎だが私は無神論者だ。入信することはないし、金銭援助も有り得ない。宗教団体に金を出すと限^{きり}が無いのである。それを先に言っておくから、それを聞いた上で未だ話があるならお聞きしよう。」

「……えーっと、先ず誤解を解かせて頂きます。こんな紛らわしい名前にした我々の責任もあるので謝らなくてはなりませんが、我々は宗教団体ではありません。敢えて言うなら政治団体です。」

「……………」

「あ、あのー、不知火社長？」

「うわ、恥ずかしい。数行に渡って推理をつらつら語って、結局間違っていた。如何^{どう}しようか。drag and dropからdeleteコースか。」

「認めたくない若さ故の過ちでも認めるべきです、不知火社長。過去の操作は良くありません。」

「電話口の声が心を決る。というか心を読まれたか？」

「何の話だ。私はもう若くないよ。して、政治団体とは？」
「話を途切れさせる。」

「あ、はい。改めて申し上げます。私、“ノアの箱舟”の浦沢と申

します。“ノアの箱舟”の創始者の一人で、暫定的な会長職に就いております。”

浦沢君は切り替えが速い様だった。

「我々はこの世界を変えたいと思い、長年議論を続けて来ました。相手は人々に根付いている汚れた心。どう行動すればそんな物を消し去ることが出来るか。相手は数千年掛かって成長し、がっしりと根を張っています。だから、答えを出すには本当に時間が掛かりました。長年そんな人間の心を現場で見ていた不知火社長ならお分かりでしょう。」

浦沢君の言葉は客観的に聞くと要領を得ない。彼の言葉だけだと何も理解する事は出来ない。だが、彼はそれを解っている。解っていてこんな話し方をしている。そうだ、彼は……

「不知火社長が世界に対して持つている感情、貴社に入社し社長という地位まで登りつめた理由を知り、我々は貴方にコンタクトを取ることを決定しました。」

……私の心の奥底に根付く小さな炎の正体を、知っている。

「君達の思想と、私に連絡を取った切っ掛けは理解した。私に連絡した目的は私の地位の利用と金銭的補助の要求と言った所か。

何か案が在つての行動だろう？まさか私に何か良案を挙げて貰おうと泣き付いてきた訳ではあるまい？」

「話が早くて助かります。この電話、盗聴の可能性は？」

先ほどの要領を得ない話し方は盗聴の可能性も考慮しての事だったのだろうか。底知れない。

「全く無い。仮にも世界トップ企業の社長室の電話だ。クリーニングに抜かりは無い。秘書も暫くは近付かない。」

「心得ました。先ず、我が団体、“ノアの箱舟”についてです。先ほど政治団体と言いましたが、正確には極左派の秘密結社です。」

「秘密結社か。それを聞くとはい浮かぶのはフリーメーソンだな。

あの組織はアメリカ独立革命やフランス革命に影響を与え、歴代のアメリカ大統領の何人かも会員だったと言われている。彼の坂本龍

馬も接触があつたという説もあるくらいだ。あれだけの規模あつての影響力だ。本来は秘密結社などではなかったと言うが、やはり比べたくなる。“ノアの箱舟”の規模は如何程なのだ？”

「少なくとも、世界の主要各国の重鎮の何人かは我々の仲間です。それと、核兵器所有国の全ては我々の仲間がその国の政治的決定権を握れるような地位にいます。ふふつ。」

最後の笑いは何だろう。

「まあ、その辺りは不知火社長に直通電話を掛けられた事より察せられるでしょう。」

……その通りだ。失念していた。あまり気にしていなかったが、冷静に考えると私に直通電話を掛けている時点でかなりの地位の人間にコネクションがある事は察せられた。いや、こいつ自体がかなりの地位にいるのか？

「では本題に入りましょう。我々は世界を変える為に如何行動すればいいのか、それを追い求めてきました。そして先日、ある結論を出しました。」

「ふむ。結論が出た、というのはすごい。ある意味パラドックスに答えを出したのではないか？」

「いえ。出た結論、というのは『世界を変える事は即ち現在生きている人間ほぼ全ての心の中に根付いている汚れた心を完全に取り除く事で、最終的にそれは不可能である』という事です。そし」

「無駄な時間を過ごした。もう話す事は無いだろう。」

今使われていた回線は今後繋がらないようプロテクトを掛けておかなくては。

「あ……まま、待つて、あの、待つて下さい！！お願い、待つて！！切らないで！！話は未だ終わってないです！！」

「私はもう話す必要が無いと判断した。それを結論としたらもう如何しようもないよ。」

「そんな事言わないで下さい。お願い、もう少しだけ話を！結論を出すのはそれからでも遅くないですううう。」

浦沢は五月蠅かった。

「分かった、続きとやらを聞こうじゃないか。」

「ありがとうございます。」

如何でもいいことだが、浦沢の声の調子が戻っていた。やはり切り替えの速い奴だった。

「さて、今の世界を変える事は不可能だ、という結論に辿り着いた我々ですが、一つの打開案が浮かびました。仲間内で物議を醸しましたが、画期的で、効果も高い案でした。」

「ふむ。その案とは？」

「世界を新たに作り上げるので」

受話器を耳から離し、机の上に置いた。電話はこのまま放置。

さて、我が社の裏の仕事専門の奴らにはハッカーもいたかな。とりあえずそいつを呼んで、相手を特定させよう。後は各種サイバー攻撃。一先ずDOS攻撃で機能停止を起こさせるか。

「あの、お願いです。最後まで、どうか最後まで話を聞いて下さい。本当、我々の仲間同士のコンタクトはインターネットがメインなので、サイバー系は本当に不味いんです。お願い、ハッキングだけはそれだけは止めて下さい。お願いします。」

置いた受話器から何やら聞こえて来る。というか、心を読まれたか？

「突如ぶっ飛んだ案を挙げる団体に興味は無い。世界を作る？どこかのS。S団の団長だ。」

「いえ、本当、お願いですから話は最後までお聞き下さい。」

「ちつ。分かった。話せ。」

「我々の出した案、それは世界を新たに作り上げる、という事です。勿論これはS。S団的に妙な力を使って新世界を作り出す訳ではありません。あくまで常人的に、科学の力を用いて世界を再編するのです。」

「再編？それは世界を都合のいい様に組み替える、という事か？それとも……リセットする、という事か？」

「リセット……それはかなりの的を射た表現ですね。そうですね、リセットです。」

「それは人間に可能か？世界を一度真つ更にしてしまうという事だろうか？」

「答えは、yesであり、そして、noでもあります。ただ、先程仰った世界の組み替え依りは遥かに容易です。だって、それは人間の心も操作しなくてはならない。それこそ神か、S。S団の団長か、長。さんの力が要りますよ。今の我々には不可能です。当然、不知火社長が宇宙人でも未来人でも異世界人でも超能力者でもない事が前提ですが。まあ兎に角、リセットは可能でないかもしれないが、少なくとも不可能ではないのです。」

何処か矛盾している様な、しかし、それが解答。『不可能ではない』という言葉に全てが詰まっているような、そしてそこには可能性という名の

「希望を感じる。少なくとも話は聞こう。」

これが私の返事だ。話を聞くだけならば何も損は無い。何より、賭けてみる事は悪くない。

「ありがとうございます。では、話を戻しましょう。」

「ああ。世界をリセットすると、そういう話だったな。」

「ええ。リセットです。人間達に根付いている汚れた心の消去。そして生きる人間全てが綺麗な心を持ち、種の繁栄の為に相互に尽くす。これが私達の想い描く、世界の最終形態であり、そして最高の姿です。」

「汚れた心の消去、か。しかしそれは人類全てに再教育を施し、心を入れ替えさせる必要があるのではないのか？百億はいる人類相手にそれはさすがに時間が掛かり過ぎないか？」

「再教育なんて必要ないですよ。既に心が綺麗な、そういう人はいっぱいいるでしょう？」

「ああ、そうだが……？」

「その人達がいるなら十分でしょう？」

「いやしかし、それは『生きる人間全て』ではないだろう?」

「いえ、それを『生きる人間全て』にしてしまえばいいのですよ。」

「……………」

何をする気なのか、想像がついてきた。想像がついたから、黙る事しか出来なくなっていた。

しかし、はつきりさせたかったから、口を開いた。

「何を行う?」

「人類の99・999999%の削減です。今、世界に存在している核兵器を全て発射して、地上を一回滅ぼします。」

千・百・十・億・倍

浦沢は、何でもないような、四月一日に子供が嘘を吐く様な気軽さで、今日が四月一日であることを確認したくなるような事を言い放った。

というわけで、第一章、第一部でした。

浦沢のキャラを考えるとどうもギャグ方面に持って行きたくなってしまいました。

第二部も投稿済みなのでそちらもどうぞ。

直ぐに出ます、第二部です。

今回は重要であり、且つ終わり頃は見ると必要ない話です。

ちよつと分かりづらくなっています。

無理して理解しなくても、この話は世界設定と、あとオチだけ読んでもらえれば十二分に楽しめます。

では、お楽しみ下さい。

今日は六月八日であった。浦沢の言った事を理解し、今日が四月一日《嘘を吐いていい日》ではないことを確認し、そして、大分前の浦沢との会話の中の浦沢の笑いに納得した。

納得して、それ以上頭が回らなくなつて、一分ほど経つてやっと頭が回り始めた。

「すまない。私とした事が。動揺してしまつた。」

「無理も無い事です。我々も今でこそ平気でこんな事を口に出れますが、当初は議論も激しかったし、かなり抵抗がありました。」

さて、落ち着き始めた所で考える。核兵器による世界の破壊か。
「残りの0.00001%はどうする？その人間は何者だ？そしてどうやって生き残らせる？」

「ええ、そこがこの計画の最重要ポイントです。心が汚れていない正しい考えを持つ人を集めるのです。これは既に汚れ仕事に手をつけている、そう、不知火社長のような人でも構いません。正しい考えを持つていれば良いのです。」

そしてそのような人達を集めて、地下深くに核シェルターを掘り、そこで生き延びます。当然、食料に困らないよう、野菜や家畜なども生き延びさせます。」

「それは本当に可能か？」

「今回不知火社長に連絡した理由の一つが正にそこにあります。貴社の技術力があればどの行為も可能でしょう？」

そう、地球上が一度滅ぶほどの核攻撃を受けてもびくともせず、千人もの人を収容出来、その人数を養えるだけの食物を保存できるシェルターの製造も、

地下にあつて尚、野菜等の植物を育てられる人口太陽の用意も、家畜を育て上げる設備も用意できるでしょう？」

「まあ、確かに可能だ。我が社の傘下の企業全てを使えばな。ただ

し、莫大な金と時間が掛かる。だが、今全世界にある核兵器全てを爆発させたら世界は二十回くらい滅びるんじゃないか？確かそういう試算があつた筈だ。さすがにそれだけのエネルギーを遮るシールドは造れない。」

「その点に関してはお任せ下さい。全ての用意が終わるまでどれくらい掛かりますか？」

「おそらく五年。シールド製作に三年、残りの準備に二年と言つた所だ。」

「ならば簡単です。三年後、地球上の核兵器を現在の二十分の一にします。」

「どうやってだ？」

「簡単です。アメリカとロシアの大統領が大量の核兵器廃棄を宣言し、中国もそれに従い、必要最低限の量以外を廃棄。そしてフランス、イギリス、インド、パキスタン、北朝鮮、その他の核保有国が全ての核兵器の廃棄を決定すればいいのです。」

「楽しみに浦沢は言う。本当に簡単そうに。人間の汚さは測り知れない。嘘を吐いて核兵器を隠し持っている可能性だつて否めない。楽観視しすぎの感があつたが、しかし、任せて大丈夫なのだろうと、疑つても仕方ないのでそう信じる事にした。私には信じるか、或いは突っぱねるという選択肢しかない。」

「破壊後の世界はどうする？放射線汚染がすごいだろう。それが世界規模だ。ヒロシマの時のように数年での復興はありえない。」

「まさかコスモクリーナーをイスカンドルから取り寄せるとは言うまい？」

「言いませんよ。実は我々、ガミラスと同じなんです。多少の放射線が生きていくには必要なんです。だから、そんな物要りません。」

「……冗談だよな？」

「当たり前です。」

「じゃあ、如何する気だ？如何やって放射線汚染を取り除く？我が

社には未だそんな技術力はない。」

「いいえ、それは違います。貴社にはそれだけの技術はあります。ただ、アイデアがないだけです。」

「そんなアイデアがあるのか？」

「あります。既に論文まで完成しています。我々の仲間には特に学者は多いですから。」

「そんな論文は聞いたこともないが。」

「当然です。隠してましたから。」

「隠した？」

「ええ、隠していました。最早、汚れた世界でそれを明かしても悪用されるだけですし、ならば我々が世界を変革する際に初めて使用するのがいいと思ひまして。」

ですが、今の我々の技術力、経済力ではとても実用化出来ない。」

「それでその点に関しても我が社の協力を仰ぎたいと。」

「ええ、全く以てその通りです。やはり頭の回転が速い方は助かります。説明が非常に楽です。」

褒められた。

「それはそうと、その論文だが、後で私の元に送っておいて貰えるか？目を通しておきたい。メールアドレスを教える。そこに私の仕事用アドレスを送るから、そのアドレスに論文を送れ。」

「それは構いませんが、不知火社長は理解できるのですか？」

「違う、それ専門の者に私から回しておくんだ……とても言いたい所だが、実は理解出来ると思う。少なくとも物理学には大学教授程度の理解度はある。それ以上の理解を求められると無理だがな。」

「いえ、それだけの心得があれば十分に理解出来ます。理解だけなら私でも出来ましたから。難しいのは閃く事ですよ。」

「その通りだな。発明家が立派なのはそこだ。私も製品開発に携わった事もあるからよく解るよ。」

同意を示す。

「だが、……。」

黙りこくる。その直ぐ後、浦沢が口を開く。

「未だ、何か問題点や疑問点はありますか？」

「……いや、もうない。」

「いやはや、流石です、不知火社長。成功率、現実性を高める為に、僅かな疑問点も詰めて行くその姿勢に感服致しました。」

「いや、企業のトップに立つ者として当然だ。企業を正しく、間違え無く導くには問題は全て取り除かなくてはならない。」

言つて、何処か自分自身に疑念を感じる。

「分かった、話はここまでだな？」

「ええ、ご理解戴けましたか？」

「ああ。理解したさ。今後の連絡手段もこの電話でいい。」

自分に嘘を吐いている様な息苦しさを感じる。

「今後、という事は？」

「入ろう。“ノアの箱舟”に入ってしまったおう。」

胸が驚掴みにされる様な痛みを感じる。

「有難う御座います。では、又後々話は詰めていきましょう。本日はこれで。お忙しい中、時間を割いて戴いた事に感謝します。」

「ああ。」

そう一言答えて受話器を置いた。今度はちゃんと電話機に置き、確かに電話を切った。

話が終わると少し落ち着いてきた。

何が成功率を上げるだ。何が現実性を上げるだ。私は自分に嘘を吐いている。

咽喉がからつからに乾いている事が、その証拠と言える。

別に喋り過ぎで咽喉が渴いている訳ではない。たかが数分喋っただけだ。

私は……びびっていた。恐れた。目を向けなくなかった。

浦沢を質問責めにした理由、それは疑問があつたからじゃない。

——否定材料を探していたのだ。計画を海の藻屑とする為の。

詮無い事であつた。浦沢は、“ノアの箱舟”は、それに対する反

論を完全に持ち合わせていた。

——私は、世界を変える事の代償の大きさに、押し潰され掛けていた。

頭に浮かんだ。目を掛けている植村君の声。信頼している秘書の顔。

——未だ私には人の心が残っていた。それら全てを打つ飛ばす覚悟が要る。

人間には不可能でないが、可能でないかもしれない。それは、心の問題。

ふと、頭に思い浮かんだ。

——果たして、今の世界は、私がここまで悩む程の価値があるのか。

負の感情。

同時に頭に思い浮かぶ。

——この価値の無い汚れ切った世界、変えるには全てを投げ遣る必要がある。

正の感情。

正負が一致する。

——悩むことも無い。この価値の無い世界を変える。正しい道へ。

こうして私は、未練を断ち切った。

心の奥底から“ノアの箱舟”に入会を決めた。

さて、当面の問題は、この渴いた咽喉を潤す事だ。と、コンコンとノックの音。

「お待たせしました。コーヒーをお持ちしました。」

秘書だ。

「ああ、入れ。」

そういえばコーヒを頼んでいたな。丁度いい。

さて、あの黒い液体で、この渴いた咽喉と、未だ落ち着かない心に安息を与えよう。

如何でしたか。

最後辺り、理解の範疇を超えていたのでは？

大丈夫です。私にも難しい。

しかし、あとはオチへ向かって一直線です。

ご期待を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3024m/>

ノアの箱舟

2010年10月8日14時00分発行